

郷土館だより

V o 1 . III No. 2

1980. 12. 1



お た う ち (三嶋大社の田祭り 1月7日)

目 次

郷土史の散歩道(8).....	1
三島の民話(1).....	3
資料紹介.....	4
行事報告.....	5
寄贈資料紹介・おしらせ・その他.....	7

郷土史の散歩道 ⑧

赤王の主

これは、大場の杉山城太郎氏・中村吉彦氏・大隈英一氏と、赤王の望月正敏氏から伺った話を、私なりにまとめたものである。

赤王山は、そう高い山ではないが、箱根山地と田方平野の接点に位置し、古くから箱根と韮山を結ぶ「韮山道」の道筋にも当たるもので、交通機関の未発達な時代には、戦略的にも、生活的にも重要な地であった。

それで、この赤王山を根拠として、この付近に絶大な勢力を振っていたのが、「赤王入道」といわれて来た、問題の「赤口の主」である。

問題というのは、

- (1)果して赤口の主は実在人物であったか？
- (2)もし歴史上の人物であるとすれば、どの様な人物であったのか？



赤王山全景 (中島 伊達 主氏提供)

- (3)赤王の主を解明する資料が何所かにあるか？
- (4)伝えられている話は、果して歴史か、単なる伝説であるのか？

といったことになる。

ところで、以上に対する応答として、従来から伝えられているものは、

- (1)赤口の主は、土地の長者であった。
- (2)赤口入道は武士であった。
- (3)赤口の主は、僧兵の集団であった。
- (4)赤口の主は、製鉄人であった。
- (5)これは、戦国時代のことである。
- (6)これは、江戸時代のことである。

といった類である。

そこで、地元じもとの赤王部落では、昭和5年の頃全部落を挙げての調査研究を行なった。しかし、残

念なことに、期待に副う様な古文書も、発掘資料も得られなかった。ただ、比較的新しい物と思える錫杖しゃくじょう1本と、多量の焼米、焼麦を掘り出したのである。

この焼米、焼麦の残骸が果たして赤王の主と関係があるのか、証明することは困難である。しかし、後述の物語と符節を合するのは、容易に捨てかねる事実であろう。あるいは、単に農家の米蔵の焼け跡ということであろうか。まことに興味が深い。

さらにまた、天保の頃あたら阿原の地を開墾していた土地の百姓が、中に朱の入っていたかめを掘り出した話も、赤王の主の存在を暗示するものとして、語り継がれている。もっとも、このかめには怪談が付きまとい、たたりを恐れた百姓が、それを大社に取めたことになっている。

赤王入道の話

これは、後北条氏の頃の物語である。

この赤王の地には「赤王入道」と呼ばれた豪族がいた。たまたま北条氏が、合戦準備のため多数の人夫と武士を徴発した。ところが、命を受けた赤王入道は如何なる理由からか、これを拒否してしまった。

怒った北条氏は、赤王山一帯を猛火で包み、入道の一族を全て焼き殺してしまった。

赤王の僧兵

昔、赤王山には多くの僧兵がいて、権勢を誇っていた。

それは、ちょうど北条早雲の頃のこと、その頃日金山の近くに「ぬすつとまや」という所があり、そこには各地から盗んで来た馬が、たくさん放牧されていた。そして、その管理をしていたのが、実は赤王山の僧兵であった。

時に、北条家からこの馬を強要されたが、僧兵たちは絶対にこれに従わなかった。

そこで、怒った早雲が焼き打ちをしたのだともいわれている。

赤王入道(別話)

赤王入道は豪農で、多くの者を農事に使役していた。

ある殿様が参勤交替で、江戸に出府することとなり、箱根越えを控え多くの人夫を徴発した。その割当てが、赤王付近の百姓にも及んだ。

その時入道は、「箱根の人夫たたらは無料だが、わしわしの家の仕事をすればお金になる」といって、百姓をおさえてしまった。このため人夫に出る者がな

くなり、すっかり殿様は困ってしまった。

そこで、この違反に激怒した殿様が、赤王入道一族を焼き打ちにしたのである。

なお赤王入道については、あの太閤記^{たいこうき}で有名になった「蜂須賀小六」の子分であった。という説もあるが、それにまつわ話は伝わっていない。

また、この赤王には、日本三大名奉行で知られた「青砥藤綱」^{あおと}が居住して、彼なりの善政を敷き土地の者を救った説話もあるが、赤王入道と関係はなさそうである。

現在も、その名残を止めている「死の池」「かご池」の伝説も、遠い昔の余韻をただよわせ、この地域が、長者・豪族の舞台として十分な条件を備えていたことを、物語っているようである。

また、すでに廃寺となって久しい養沢寺^{やうたくじ}は、あるいは赤王入道一族の菩提寺ではなかったろうか。まことに謎は尽きない。

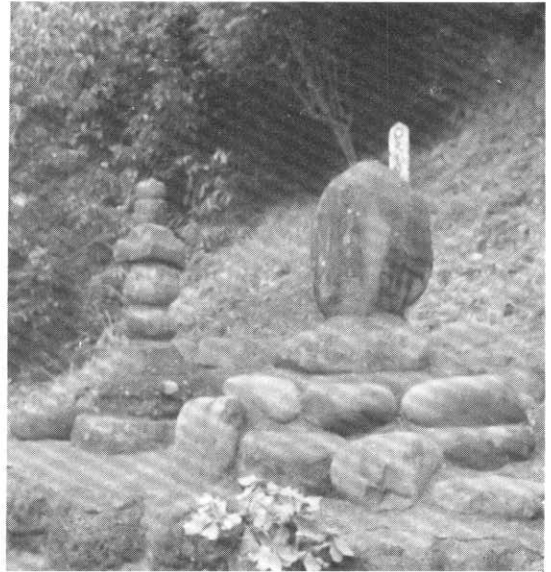
ところで、赤王一帯に残る地名に、「^{くつわがた}轡形」「^{おとりだ}馬場本」「^{せきぐち}関口」といった一連の線と、「^{おとりのた}御通田」「^{せきぐち}道免」「^{せきぐち}関口」「^{さんたのだい}散彈台」「^{せきぐち}脇の田」「^{ほうしがくれ}法師隠」「小太郎屋敷」という一連の線が、縦横に交差していることも、一言に偶然の結果と切り切れないものを感じる。つまり、そこに何かがあり、きわめて人為的な跡であることを示唆される。

宮川を中心にして、ほぼ南北に走る丘陵にはさまれたこの地帯は、かの戦国の雄「朝倉氏」の本

拠「一条谷」を連想させる。(規模には大きな差違があるけれども)

要するに、そこに歴史が埋没され、眠らされている可能性が強いということである。

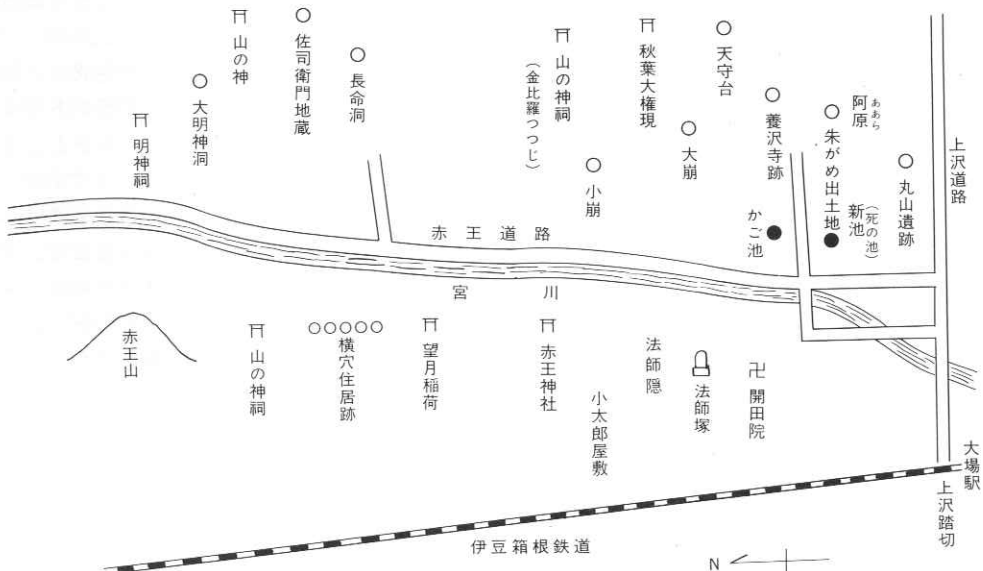
赤王部落の人々は、赤王入道の供養のため、開



赤王入道の墓 開田院 (中島 伊達 主氏提供)

田院の境内に「赤王入道の墓を作り、毎年9月1日を期してその菩提を弔っている。

終りに、この稿をまとめるに当って、多大のご援助をいただいた、中島の伊達 主氏に厚く御礼を申し上げます。



赤王地区案区図 (中島 伊達 主氏提供)

三島の民話 (1)

最近は民話ブームともいえそうです。

この「民話」という言葉は、厳密な意味からは「昔話」や「伝説」とは違った概念であると思われます。しかし、ここでは今の社会の通念に従って、以前の「昔話」や「伝説」を総括した意味のものとして、使用して行きたいと思います。

(1) 三島の民話

三島は古い歴史の町ですから、集めて見ますとなかなか多くの民話があります。最近郷土館で収集したものだけでも、150篇近くにも及んでいます。

ところで、この収集作業中に感じたことですが市中にはまだ未発見、未公開の民話が、かなり多く埋もれたままになっているようです。そして、すでに埋没して年久しく、すっかり収集不能になっているものも、かなりの数に上りそうです。

これは、ほんとうに惜しいことですが、元来民話というものは、「土から生まれて土に帰って行く」のが本質だそうです。したがって一面からいえば、それはやむをえないことかも知れません。しかし、他の一面からは、今までの保護の不十分さを悔まざらねえといえます。

ご承知のように、民話というものは、誰れが作者ということはなく、多くの民衆に依って創作され、育てられて来たものです。

つまり、三島の民話は三島市民の共有の財産なのです。いや、「宝物」とでもいった方が適当かも知れません。

したがって、三島の民話は市民の共同の責任において保護すべきものと考えます。

(2) 民話の保護保存

ところで、「民話を保護する」というのは、具体的にはどういうことになるのでしょうか。私が考えますのには、次の二通りがあると思います。

①その第一は、民話を収集し記録しておくことです。

元来民話というものは、文章や絵図などに依って記録伝承されることよりも、人の口で「語り継がれる」ことが本質的であるようです。

しかし、「語り継ぎ」が必ずしも絶対的とはいえません。それは語る人の主観的私情（好みや愛憎など）に依って、その内容が次第に改変され、原形を失なうおそれがあるからです。

また、その人の「語り口」に依っては、民話固有の情趣にもかなりの異変が起こることにもなります。長い年月と、多くの人の手によって洗練されて来た民話は、個人の私的感情に依って侵害されてはならない尊厳性を持っているのです。

こういう意味からも、民話を出来るだけ原形に復し、それを文章や絵画として記録しておくことは、きわめて有効な民話の保存方法であるといえます。また絶大な保護策でもあります。

②その第二は、民話を十分に「語り継ぐ」ことです。

民話が、すでに絶滅の危機を迎えているとは考えたくありませんが、最近非常な勢でその傾向を見せていることは事実だと思います。

筆者の幼小の頃は、どの家でも祖父母や父母が祖先のことや、地域の民話をよく語り聞かせてくれたものです。それは、ある時は日当りのよい縁側であり、また多くは囲炉裏端であり、寝床の中でありました。

また、土地の古老も、神社寺院の施設や境内の広場などで、得意になって語ってくれました。

現在、こうした風景は、ほとんど見る事が出来なくなりました。

民話が、どれほど子女の情操の陶冶に偉大な効果を挙げたかを、つい見過してしまっただのが現状ではないでしょうか。

そして、「ふるさと意識」の養成に、民話が特効薬であることを再認識する必要がありますね。それは、現在ほど青少年が「ふるさと」を喪失した時代は他にないと思われるからです。

ご承知のように、昔は「語部」が設けられて「語り継ぎ」が計画的に行なわれました。それを古老や父母が代行するようになったのは、文字が発明されてからのことでしょう。しかし、これはずいぶん長い間継続されて来た事実です。

今ここで、これを断絶させることは、まことに残念なことです。

どうかみなさん、昭和の語部となって、語り継ぐことを復活させて下さい。それが民話を保護する最大の方途なのです。

館長 長谷川福太郎

資料紹介（館藏品）

■ 展示品見学の手引 —三四呂人形—



「水辺興談」

野口三四郎の生涯

三四呂人形の作家は野口三四郎です。三四郎は明治30年代に三島の大中島に生まれました。小学校を卒業して葦山中学校(現県立葦山高校)に入りましたが、中退して東京へ出ました。東京での仕事は写真屋の見習いでした。しかしこの徒弟生活も長続きせず、次に入ったのは三越に設けられた早撮り写真部というところでした。今でいうスピード写真の走りとも言える最先端の職場でしたが、三四郎にはまだ少しの不満があったようでした。そんな彼に人形作家の道を開かせたのは、写真の仕事で出張した朝鮮の風俗でした。元來絵は得意であった三四郎は、朝鮮での印象を絵に残そうとして多くのスケッチを描きました。出張から帰ると居を大宮(埼玉県)に移し、人形の製作を始めるようになったのでした。三越を首になることはすでに覚悟の上での行動でした。初期作品の妓生等はこの時のものだと思います。その後の彼の生活は決して楽なものではありませんでした。一介の人形作家が一家の生活を支えなければなりません。貧窮こうじゅうの製作活動に光明が見えてきたのは昭和9年の甲戌会の結成の頃でした。鹿児島寿蔵、堀柳女、野口光彦らと結成したこの会は、作家として世に出る第一歩でした。ところが不幸はまたも三四郎にふりかかってきました。最愛の子、桃里の死でした。三四郎の落胆は大きく、生きる張り合いをなくした彼は、昭和11年第1回総合人形芸術展で獲得した人形芸術院賞を唯一の榮譽として、翌12年37才の若さで世を去ったのでした。

「水辺興談」とふるさと

「水辺興談」は人形芸術院賞をとった、三四郎の代表作の一つです。私たちがこの作品に魅せられるのは、これが賞をとった作品であるためではなく、作品からあふれてくるほのぼのとしたふるさとの香りを感じるからにほかなりません。裸ん坊の子供が二人。彼らは今清流でぞんぶんに泳いできたばかりでした。やさしい陽だまりの中で、獲った魚の自慢話しでもしているのでしょう。二人の子供の無邪気な世界と見る側のノスタルジーとが重なり合って、不思議な思いの中にたどろめく自分を経験するでしょう。三四郎の生活を支えていたのは、なによりも彼のふるさとでした。

それは「水辺興談」の中の、子供の頃の清流あふれる三島にほかならなかったでしょう。

エピソード

沼津市にお住まいの、三四郎の実妹渡辺ちゑさんからうかがったお話です。最愛の娘桃里を亡くした後、悲しみをこらえて製作に励んだ三四郎でしたが、不思議なことに、人形の顔がどうしても娘桃里に似てしまうのです。三四郎は「人形が動き出して困る」と悩んだそうですが、ちゑさんの眼にも驚くほどに桃里の顔が鮮明に浮かんできたそうです。三四郎の娘への愛情を知る興味あるエピソードだと思います。

今郷土館に展示している「桃子」「里子」は、桃里ちゃんの名前を二つに分けて作った、娘の分身ともいえる人形です。(杉村 斉)

行事報告

～郷土館「夏の映画教室」～

8月1日～8月7日(6日間)上映した。

入場者数(約)

8月1日(金)	50人	8月5日(火)	40人
2日(土)	30人	6日(水)	20人
3日(日)	50人	7日(木)	30人

～郷土館「夏休み郷土学習会」～

7月29～7月31日の3日間、受講生徒は、市内の小学校5年生、6年生を対象に83名が参加した。

講師 6年生 小泉安三氏(中郷小教諭)
5年生 稲木久男(郷土館職員)

「戦国時代と郷土」をテーマに歴史を学び、史跡めぐりを行なった。

○現地見学コース

林光寺(加屋町)～宝鏡院(川原ヶ谷)～山中城址～早雲寺(箱根湯本)～小田原城(小田原市)～韮山城址～堀越御所跡～願成就院

～郷土館市内史蹟めぐり～

「伊豆の長八ゆかりの寺をたずねて」

10月28日(火) 参加者 32名

市内にある伊豆長八ゆかりの寺をたずねて、足跡と作品の見学を行なった。

○見学コース

三島駅集合(9:30)、出発(9:40) 定期バス

徳倉谷戸着(9:50)～歎喜寺着(10:00)

歎喜寺見学(10:00～11:20)

地藏堂、本堂、庫裡内の長八作品

墓地にて、高遠石工 北原数右エ門の墓石
歎喜寺出発(11:20)～龍沢寺着(11:50)

昼食(11:50～12:50)

龍沢寺見学(13:00～14:00)

隠寮、開山堂、不動堂、鎮守堂内の長八作品
(塗壁絵、星定老師像、不動明王像、天孫降臨塗額等)

龍沢寺前にて解散(14:30)

伊豆長八

長八は、伊豆松崎出身の左官職人であった。子供の頃から細工物をこしらえたり、絵を画いたりがとても上手で、その才能は、「名工長八」となり得る可能性を十分に周囲に期待させるものであったという。長八は、松崎浄感寺の正観上人から

～郷土館「民俗講座」～

郷土館では、9月28日(日)、戸羽山瀚氏を講師に招いて、『宿場の風俗』と題して、江戸時代の宿場の飯盛女、博打、親分などを含め、社会風俗の歴史について講演を行なった。

受講者は、高校生以上の一般市民を対象に、50名以上の参加者があった。



6年生、現地見学(山中城址にて)

は読み書きや人生についてを、地元の左官の親方仁助からは初歩的な左官の技術を教授された。

その後、左官職人として腕を磨くために江戸に出た。江戸での長八の師匠は、播磨屋源次郎と喜多武清であった。絵心のあった長八は、川越に住する絵師喜多武清について学ぶことにより、並みの職人には無い感覚と技術を養うことができた。

もう一人の師、播磨屋源次郎は、江戸でも勢力のある評判の左官職人であった。長八は源次郎の娘と結婚して、播磨屋の後継ぎとなったのである。

播磨屋十代目の金兵衛、すなわち江戸名工長八は、こうして誕生したのであった。

三島での長八は、すでに老境に入り第二期全盛時代であったといえる。ここでは、過去に無かった仕事の質を求め、それを極めたのであった。言いかえれば、長八は一介の職人から鍍絵師への変身を図ったのであった。彼のこの人生へのチャレンジとも思える企てを、内から支えたのは仕事にかかる情熱であり、信仰心であった。外からは星定老師の支えがあった。

長八が星定老師のもと、三島龍沢寺に百日参籠したのは明治11年1月のことだった。64才の身体と精神に自らムチをふるい参籠した結果、不動明王像を完成させることができた。開眼第一作目である。天祐居士の号を受けたのはこの時である。

行事報告

～体験教室「縄文土器作り」～

今年で第4回目になった「縄文土器作り」は、夏休みを利用して、18名の中学生が集まり行われた。粘土と赤土を混合することから始まり、最後の野焼きで完成するまで合計4～5日間はかかるが、全員1日も休まず、むしろ日に日に熱が入って来た。自らの手で一つのを創造する喜びであるのだろう。彼らの熱心さには指導する私たちも圧倒されるほどで、とにかく野焼きでは良いものが、割れずに焼きあがるよう祈らずにはいられない気持ちになるのであった。しかしながら「縄文土器作り」は難しく、今回もまた100パーセント満足すべきものではなかった。もちろん満点がそんなに容易に取れるとは思っていないが、過去3回と今年とやってきたなかで、反省すべき問題点がいろいろあった。ここではそれらの諸問題点をかえりみることにしようと思う。

失敗、それも貴重な経験である。私たちはこれを土台に来年もチャレンジするだろう。

素地土

良い素地土を作らなければならない。素地土は土器の素材で、粘土と種々の混合土から成っている。縄文土器の場合、赤味を帯びた色は鉄分を含んだ赤土（ローム）によるといわれ、赤土は混合土として欠かせない。そのほかの混合物として、腐蝕土、砂、花崗岩の腐蝕土、金、黒雲母などが分析の結果判明している。良い素地土とは粘土と混合物が適当な割合で調合されているものをいうのだが、これが難しいのである。一つには粘土の性質によって割合を変えなければならない。混合物の割合が多すぎれば粘土は粘着性を失ないポロポロになってしまうし、少なすぎれば火に入れた時粘土の収縮率が高すぎて割れ易いのである。こうしたことから私たちは粘土自体の性質等もよく知っていなければならないと言える。

成形

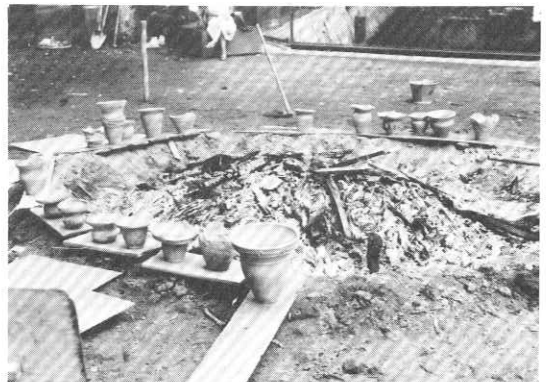
素地土の調合、ねりあげ（土中の気泡を抜く）2～3日間のねかせ（粒子のイオン活動をおこさせる）段階を経て、いよいよ成形に入る。土器の用途を考え、作ろうとする形をデッサンして仕事にかかるのであるが、これが思うようには行かない。1本1本粘土ヒモを作り、積んでは密着させ

る輪積み法である。ヒモとヒモが接続する箇所には空気が残らないよう、かつ全体の形に注意して積み上げる作業はかなりの熟練した技術を要するものである。私たちは成形作業において、あらためて縄文人の感覚の良さと技術に感心させられたのであった。成形は長時間をかけ、しかも集中してたんねんに行なわなければならない作業である。粘土の厚さが不均等だったり、雑な積み上げだったりだと、火に入れた時必ず割れてしまうからだ。

焼成

形が出来上ると野焼きの準備である。この期間に土器中の水分をすべて抜きとってしまわなければならない。このための陰干しは最低2週間を要するが、天候次第ではもっと長くとる必要がある。野焼きの炉は、石で囲みを作ったり或いは土中に穴を掘ったりして、火がなるべく平均に回るようにする。炉内の土面の水分も禁物で、本焼きの前の空だきは十分にしなければならぬ。空だきの時、陰干しの済んだ土器を炉の周囲に置いて熱し、乾燥させ火に慣らすことがかんじんである。焦りは禁物である。空だきの灰の中に土器を並べ、よく乾燥したマキを積み上げ本焼きとなる。約1時間の本焼き中に、最高温度は900度C位に達すると言われているが、炉の作りが良く、マキが良くなければ困難である。

以上のプロセスを経て、まがりなりにも焼き上り、今年の日程を終了した。ふり返れば、全工程が問題点であったように思える。しかし未熟な私たちにとって、経験を重ねることにより一つでも体得できたならば、それは成功だと言える。来年、さ来年と回を重ねる度に、何かがふくらんで行くだろうから。



空だきの炉辺に並んだ作品

■寄贈資料紹介■

日付	提供者	住所	資料	点数
55. 7. 15	滝川次郎氏	神奈川県綾瀬市深谷	三島暦、他	27
" 7. 30	湯山茂氏	市内徳倉	油しぼり機	1
" 8. 12	杉山正志氏	修善寺町柏久保	マンガ(農具)、他	5
" 8. 18	鈴木敏弘氏	市内中央町	タンス	1
" "	竹林重行氏	市内富士ビレッジ	縄文式土器片	多数
" 8. 31	寺尾恒男氏	市内大宮町	古文書、古書籍、他	"
" 9. 25	星合さかえ氏	市内新宿	手回しミシン、他	4
" 10. 4	近藤喜久雄氏	市内加茂川町	三島略暦、卒業証書	3

今回は、寄贈していただいた多くの資料の中から、三島暦について報告いたします。三島暦は日本でも京暦(京都)と肩を並べるほどの伝統を持つ暦で、中世には三島を中心に関東一円に頒暦の勢力をのばしていたものです。江戸時代には、東海道一の名社三島神社とともに旅人に知れ渡り、三島みやげの筆頭となっていました。しかし現在に残されている当時の三島暦は、案外多くはありません。もし、お宅のタンスの隅にでも見つかったなら、ぜひご寄贈いただきたいと思ひます。



★★★★★おしらせ★★★★★

■郷土館の行事予定■

- 12月14日(日) 体験講座「おかしり作り」
- 56/2月1日(日) 「初午職作り」講習会

■刊行物案内■

- 三島小誌(四)「戦国の争乱」〈頒価〉 700円
室町幕府開府から、大阪夏の陣終了までの約二百八十年間を対象に、山中城合戦を含む三島市周辺の歴史が書かれています。

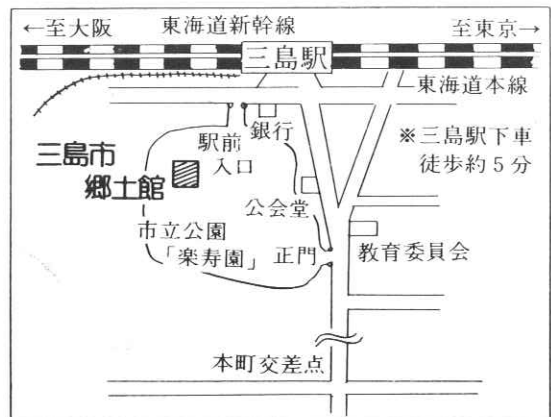
- 第一部 「戦国前期」室町幕府と関東管領
- 第二部 戦国大名「後北条氏」
- 第三部 「岳南の抗争」
- 第四部 「小田原征伐」
- 第五部 「統一の完成」
- 第六部 「こぼればなし」
- 第七部 「人々の暮らし」
- 第八部 「学芸と宗教」

- 三島小誌(別冊)「ふるさと探訪」〈頒価〉 500円
三島市内の史跡、サイの神の里、神社、寺院、博物館、年中行事、芸能、景勝の地、伝説の地、墓碑、などの案内書として書かれ、詳しい地図も入っています。

- テーマ展「みしまの道」〈頒価〉 200円

利用案内

- 休館日 毎月第1月曜・12月27日～1月2日
- 開館時間 午前9時～午後4時30分
- 入場無料 (但し、楽寿園入園の際、有料)



郷土館だより No.8

昭和55年12月1日発行
(年3回発行)

編集 三島市郷土館
住所 〒411 三島市一番町19-3
TEL.0559-71-8228
発行 三島市教育委員会